

Midlife and late-life handgrip strength and risk of cause-specific death in a general Japanese population : the Hisayama Study

岸本, 裕歩

<https://hdl.handle.net/2324/1807141>

出版情報 : 九州大学, 2016, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)



氏 名：岸本 裕歩

論 文 名：Midlife and late-life handgrip strength and risk of cause-specific death in a general Japanese population: the Hisayama Study

(日本人一般住民における中年期・高齢期の握力と死因別死亡のリスクとの関連：久山町研究)

区 分：乙

論 文 内 容 の 要 旨

高齢者において、握力は総死亡リスクとの間に負の関連を示すことが報告されている。しかし、一般住民において中年期に測定した握力と総死亡および死因別死亡の関係は明らかでない。そこで本研究は、福岡県久山町の40歳以上の日本人地域住民2,527人(男性1,064人、女性1,463人)を19年間前向きに追跡した成績をもとに、中年者と高齢者における握力と総死亡および死因別死亡との関連を検討した。対象者を性・年齢階級別に分けて各群の握力レベルに基づき3分位し、それぞれの同分位群を合わせて3群を作成した(T1群：最低値群、T3群：最高値群)。追跡期間中に783人が死亡した。その死因の内訳は循環器疾患235人、悪性腫瘍249人、呼吸器疾患154人、その他の疾患145人であった。40～64歳の中年者において、多変量調整後の総死亡のハザード比(95%信頼区間)は、T1群と比較してT2群で0.75(0.56-0.99)、T3群で0.49(0.35-0.68)と有意に低かった。65歳以上の高齢者も同様に、T2群では0.50(0.40-0.62)、T3群では0.41(0.32-0.51)であった。死因別にみると、中年者・高齢者ともに握力レベルが高くなるにしたがって循環器死亡、呼吸器死亡、その他の死亡のリスクが有意に低下したが、悪性腫瘍死亡のリスクとの間に明らかな関連はなかった。

以上より、日本人一般住民において中年者と高齢者の握力は、総死亡、循環器死亡、呼吸器死亡、その他の死亡との間に有意な負の関連を呈することが示唆される。